

第 29 回石狩川上流川づくり懇談会

○日時：令和 5 年 11 月 21 日(火) 13:30~16:30

○出席者

委員： 白井座長

石田委員、加納委員、佐々木委員、塩田委員、高橋委員、武田委員、寺島委員（五十音順）

（泉谷委員 欠席）

○議事概要

1. 開会

2. 議題

- 1) 河畔林の連続性について
- 2) 河川生物の保全について
- 3) フットパスの整備について
- 4) 施設やサインのデザインについて
- 5) 旭川駅周辺かわまちづくりについて
- 6) その他

3. 閉会

○石狩川上流川づくり懇談会の開催状況写真



白井座長



石田委員



加納委員



佐々木委員



塩田委員



高橋委員



武田委員



寺島委員



○第 29 回議事要旨

主な意見

1. 河畔林の連続性について

- ・忠別川の大正橋左岸側にハリエンジュ林があるが、林床にはほとんど他の草本類が生えていない。ハリエンジュの特性として色々な成分を出していると言われているので、確認しておく必要がある。
⇒事務局：ハリエンジュがほかの生物の多様性みたいなものを奪ってしまうことも、問題と思うので、今後もハリエンジュについては注目して見ていきたい。

2. 河川生物の保全について

2-1. サケ・サクラマス産卵床について

- ・サケ産卵床数が、忠別川よりも石狩川の方が少ないということは、湧き水と砂利の環境が、石狩川の方が良くないということを表している。忠別川は、石狩川に比べると砂利があるのと、河川勾配が急なため伏流水が出やすい構造になっていると考えられる。
- ・石狩川は全国でも有数の大河川であり、その川にサケが継続して遡上していることは、非常に大きな意味を持っている。これをどう保全していくかを少し腐心しなければならない。今後、石狩川において伏流水をどう確保するのか。砂利は、流況によって年々変わるが、感覚的に全体的に砂利が減少している感じがする。砂利を確保していくことが1つの課題になるのではないかと思う。
- ・サクラマスはサケと比べて1年余計に川に滞在する。産卵してから降海するまでの間は、季節に応じて下流から上流まで河川を利用する。湧き水や砂利のいい環境だけではなく、川全体の環境がサクラマスには影響してくる。サケと同様にサクラマスにも注目をして、河川環境をどう維持、保持するのかを考えていく必要がある。
- ・沿岸に帰って来ているサケの動向と、上流に遡上してくるサケの動向がシンクロしているかについては、今旭川に帰ってきているサケは、過去の放流魚のため千歳産の遺伝子を持ったサケであることから、基本的には同期することになると思う。ただし、近年、野生魚の割合が高まっており、自然産卵を繰り返していることから同じ遺伝子であっても少しずつ動向は変わっていくと考えられる。河口から160km以上も離れた旭川に野生のサケが帰ってきている現状を継続して調査しているこのデータは、全国的に見てもあまりないと思うので、今後もサケ類の保全を考えていくと、この調査データは非常に重要で、今後も継続して取っていただきたい。
- ・現在は第3世代のサケが遡上しているのが、今後は第4世代に変わるのか。来年以降もこのままなのか、あるいは増えていく状況にあるのか？
⇒委員：サケの捕獲施設がないので個体数をカウントすることはできないが、産卵床数の推移から見ると、いつか100床を切るぐらいのレベルまで落ちたが、令和4年度の結果では400床ほどとなり微増が続いてきている。この状態が確保されれば、消えてなくなることはないと思う。最初に遡上を確認されたのが2003年で今年で20年となるが、落胆するような状況ではないと思う。
- ・昨年は沿岸に帰ってきているサケの数が豊漁と言われたが、かつて石狩川に遡上してきたサケの量からみると半分ぐらいである。今年も昨年と同じぐらい沿岸に回帰すると予測されているが、今のところのデータでは、7割ぐらいにとどまっている。ところが千歳川の遡上率は、ほぼ昨年並みなので、石狩川のサケは沿岸とは状況が違うようである。

2-2. ミクリポントー生育環境改善に向けた取組みについて

・平成5年頃のミクリポントーはかなり水面が見え、ミクリ以外の草があまり生えていなかった状況であった。その後どんどん草等が生えて、水面が見えないぐらいになっていた。奥の方のヨシは地下茎を伸ばしながら、ミクリの生息場にどんどん攻めてきているので、それを除去する必要があると思う。現地調査を行いながら、ある程度の対策を考えていく必要がある。

⇒事務局:ヨシが迫ってきているので、急に大きく改変するというのは難しいけれども、毎年現地を確認しながら、必要な対策を実施していければと思う。

・ミクリは石狩川水系にとって貴重な植物なので保全したほうがいい。ただし、ミクリの生える環境が基本的にないと、保全のために人的なエネルギーを使ってまで維持することが良いのかという議論が出てくる。今のところ、ポントーのところはワンド地形の環境が少し残っていて、それによってミクリが保全されていると思うが、今後もそのまま上手くいくかは分からない。ミクリポントーをミクリが生育できるような環境に改善する方策を取るのか、もしくは、その場所だけに限定しないで、水系全体を見て、生育できる環境の場所を確保していくことも方法かと思う。

⇒事務局:水系全体としてかつてはミクリがあった個所は、現在は水もないような状況になっているところもある。ワンド等を積極的に改変することは考えていなく、今回忠別川でも河川事業を行っているが極力ワンドの状況を残すことも考えながら行っている。今後も配慮しながら実施していく。

3. フットパスの整備について

3-1. フットパスコース・マップについて

・市民の皆さんは桜となると常盤公園や神楽岡公園を思い浮かべると思うが、河川敷にも桜があることをあまり知らないかもしれない。桜つつみをマップに載せることは、大変良いことと思うので、是非進めて頂きたい。

・マップには「桜つつみ」を文字情報と眺望ポイントのピクトグラムで表記しているが、お花の場所と分かるような色合いにするのも良い気がする。

3-2. フットパスコース上のシンボリックな樹種への樹名板設置検討について

・暴露試験に使用した樹名板は、ナラの乾燥材で6mm厚板であるが、実際にはナラにこだわらないで、広葉樹や集積材でも良いかと思う。試験結果としては、樹名板の縁の黄色が剥げてきているが、より耐候性の強い塗料もあるので、実際つくるときには幾つか検討されて選ばれると良いと思う。

⇒事務局:樹名板の材質は木製で進めたいと考えている。

3-3. フットパスの利用推進に向けた検討について

・フットパスコースを、出来るだけ市民等の多くの方に利用していただきたい。

そのためにも、ウォーキング関係のグループに協力していただいて、フットパスコースを大いに利用していただきたいと思う。

4.施設やサインのデザインについて

4-1.河川管理用通路の安全利用に係る啓発方法の検討について

- ・歩行者と自転車が同じ通路を通行するため、事故につながるような危険なことが度々ある。歩いていると自転車はほとんど音がしないので、急に後ろから自転車が脇を通り抜けていくので、ハッとすることがよくある。歩いている人が、突然方向を変えたり、止まったりすることがあれば、大きな事故になる可能性がある。一番危ないのは通学時間で、高校生等が自転車で河川敷を通学しており、グループで走っている。
- ・ヨーロッパでは、街中でも郊外でも自転車の通る道と歩行者の道は分けられている。日本は基本的には通行帯が分かれていないので、後ろから自転車が来て、歩行者の横を通るときには、何らかの合図としてベルを鳴らす、あるいは「通ります」という声をかけていただくことは必要だろうと思う。ただ、後ろからベルを鳴らされると怒る方がいるようで、そうだとすれば「通ります」という声をかけて頂かないと駄目かと思う。
- ・自転車は歩行者のそばを通り抜けるときには、十分に速度を落として頂くことが大事である。啓発チラシには注意点として書かれているが、これは散策路だけの話ではなくて、市内でも同じである。色々と気をつけなければいけない、考えなければいけない問題かと思う。
- ・通行区分に関しては、過年度に路面標示の実験を行ったことがあり、標示を見た人が瞬時にきちんと正しい方を通行される方もいた。冬の間は雪に埋まり景色として阻害することもない。交通マナー啓発の立て看板は、自転車のスピードで看板が視認できるのか等の検証が今後必要になると思う。